

		質問	回答案
40	製品ポートフォリオ：A1・A2・C1・多層型防衛	昨今の防衛環境では、GPS妨害や通信ジャミングなどの電子戦（EW）が激化しているとのことですが、テラドローンはこうした過酷な環境下でも運用可能なのでしょうか？	昨今の防衛環境では、GNSS（GPS等の衛星測位信号）妨害や通信ジャミングなどの電子戦（EW）環境下でも運用できる無人アセットの重要性が高まっています。当社が展開する偵察・監視用UAV「Terra C1」は、こうしたGPS-denied環境を想定し、機体制御、テレメトリデータの取得、映像伝送の継続性を高める通信・ナビゲーション機能を備えています。 具体的には、ベースとなるBesomar社の機体において、Sine-Linkや無線ビーコン（Radio beacons）などを活用し、GNSSや通信が妨害される環境下でも運用継続性を高める設計がなされています。 防衛・公共安全領域では、カタログ上の性能だけでなく、実際の過酷な運用環境で機能したかどうかが重要です。ウクライナの実運用環境で得られた知見を踏まえ、電子戦環境下での運用を前提に開発・改善されている点は、コンバットブループンが重視される防衛市場において、当社の重要な差別化要素になると考えています。
41	製品ポートフォリオ：A1・A2・C1・多層型防衛	偵察・監視を担うドローン「Terra C1」の想定される用途を教えてください。	Terra C1はフロントラインで使用されており、現代の防衛・公共安全領域で求められる偵察・監視、状況把握、前線支援に対応する実用性の高い機体だと考えています。 主な特徴は5点です。第一に、電子戦環境を前提とした設計です。GPS妨害や通信ジャミングが想定される環境下でも、機体制御、映像伝送、位置把握を継続しやすくするための通信・ナビゲーション機能を備えています。第二に、160km/h以上のハイスピードで8時間以上の飛行、10倍光学ズームカメラを備え、広域の状況把握や対象確認に活用できます。第三に、手投げまたはカタパルト発進、ワンボタン自動着陸に対応しており、滑走路などのインフラが限定された現場でも運用しやすい点が特徴です。飛行プロセスにおけるオペレーターの関与を最小限に抑える自律性」を確立しています。さらに、「ボタン一つでの自動着陸システム（Automatic landing with a single button）」を標準搭載しており、過酷なフィールド環境においてもオペレーターの負担や人的ミスによる機体損失リスクを極限まで低減しています。第四に、最大4kgの積載に対応し、偵察に加えて医療品・重要物資の輸送など、前線ロジスティクス支援にも活用可能です。 これらの特徴により、Terra C1は単なる偵察機ではなく、Terra A1・Terra A2による迎撃と組み合わせることで、脅威を「見つける・把握する・対処する」までを一体で支援する多層型無人防衛ソリューションの中核アセットになります。防衛プライムや政府機関に対して、実運用環境を前提とした偵察・監視能力と、迎撃アセットを組み合わせで提案できる点が、当社の大きな差別化になると考えています。 これにより、昼夜を問わない国境や海域の監視、島しょ部の警戒、さらには災害時の迅速な状況把握など、長時間の偵察・監視任務において重要な役割を果たします。
42	製品ポートフォリオ：A1・A2・C1・多層型防衛	実戦環境ではGPSジャミングや通信遮断が常態化していますが、当社の偵察ドローンが搭載するSLAM（自己位置推定）技術や暗号化通信は、競合（民生品の転用や他国の防衛用ドローン）と比較して、具体的にどれほど高い任務達成率（生存性）を実証できているのでしょうか	偵察・監視任務は、相手の通信ジャミングやGPS妨害が最も激しい最前線で行われます。そのため、いかにカタログ上の機体スペックが高くとも、激しい電子戦（EW）によって飛行経路を見失ったり、取得した映像データが送れなくなってしまうのでは防衛装備として意味がありません。搭載している通信・位置推定技術の詳細な仕様や、具体的な任務達成率の数値については、安全保障上および防衛運用上の機微な情報に該当するため回答を差し控えますが、当社の偵察・監視ドローン「Terra C1」の最大の強みは、まさにこうしたGPS・通信が制限される過酷な電子戦環境下での運用を前提に設計・改善されている点にあります。
43	製品ポートフォリオ：A1・A2・C1・多層型防衛	取得した映像から脅威を自動で識別するAI機能などは搭載されているのでしょうか。	搭載済みです。取得したカメラ映像をもとに、AIで対象を検知し、一定の画素サイズ以上で脅威対象として識別する機能を有しています。AI検知は5～10px程度から開始可能で、安定したAI識別には15～20px程度が必要となります。
44	市場環境・C-UASの必要性	中東情勢が落ち着いたら、需要が縮小するのでしょうか。	中東情勢が一定程度落ち着いた場合でも、防衛需要が直ちに縮小するとは考えていません。今回の中東情勢で各国が再認識したのは、特定の紛争リスクではなく、航続距離2,000km級の低コスト自爆型ドローンが、重要インフラや都市部を遠方から攻撃し得ること、現在の防衛装備では有事に自国を守れないという構造的な脅威です。 高額な迎撃ミサイルだけで対応し続けられ、コスト面だけでなく、迎撃手段の在庫枯渇そのものが防衛力低下に直結します。つまり、ミサイルを準備するだけでは不十分であり、低コストで大量配備可能な迎撃ドローンを含む多層型の防空体制が必要になります。 また、ロシアではシャヘド型ドローンの現地生産拡大が報じられ、中国企業による関連部品供給、北朝鮮での生産能力構築支援に関する報道もあります。低コスト長距離ドローンの脅威は、特定地域に限らず拡散しつつあり、防衛ドローンは一時的な防衛特需ではなく、各国の重要インフラ防護や防空体制に必然的に組み込まれる中長期的な防衛インフラ市場になると考えています。